

# マスコミュニケーション研究とデータ管理

## —認知的道具としての調査票の意味—

是永 論 (立教大学社会学部社会学科 助教授)

Mass communication research and data management:  
survey questionnaire as a cognitive artefact

今回の報告\*では、筆者が関わってきた情報行動に関する調査を素材にして、データ管理のうち特に調査票に関する問題を考えていきたい。その際、単にそれらの問題を個別に直接的な形で指摘するよりも、あらかじめ調査というものを「認識の生産プロセス」(佐藤 [2002])として位置づけた上で、その中で認知的な道具として調査票がもつ意味をとらえなおすことを目的としている。

### 1. 「日本人の情報行動調査」プロジェクト

まず今回の報告の背景となる、「日本人の情報行動調査」プロジェクトについて簡単に説明しておく。本プロジェクトは情報化の進展が著しい近年において、日本に在住する人々の情報行動の実態を継続的な形で把握するために、東京大学の社会情報研究所が中心となって行なってきたものである。ここでいう情報行動とは、情報メディアを媒介とした行動に、会話・集会、手書きの文章作成といった直接的なコミュニケーション行動を加えたものとして定義されている。詳しい分類の内訳は表1のようになっている。

調査は1995年を第1回として、以後5年ごとに継続して行なうことを前提に形式が組

まれている。調査形式は主に日記式と質問紙の形式に分かれている。日記式については、全体として2日の記録時間を15分ごとの単位に分けたうえで、その単位時間中に10分以上持続した行動を表1のコードに従って当該時間の枠に回答者が自ら記録していくというプリコード形式をとっている。手紙や電話・Eメールなどに関しては受信および送信の回数をとる形式も併用されている。

調査票はデモグラフィック属性のほかに、情報機器の所有や情報に対する態度(倫理観・マナーなど)を経年ごとに統一した形式で尋ねている。サンプルについては13歳以上から69歳未満を対象に全国200地区から層化二段無作為法で抽出し、2000年度ではそのうち2017の有効回答を得ている(回収率67.2%)。

調査結果についてはここでは詳しく触れないが、2000年度の結果でもマスメディアの接触行動が全体の53.9%を占めており、テレビの接触時間が全体中でも47.0%に上るなど、パソコン利用などによるパーソナルメディアの伸長も見られる一方で、依然として中心的な位置を占めていることが示された。

### 2. 認知的道具としての調査票

本稿において「データ管理」として問題にしたいのは、本プロジェクトのように時間的

に継続した調査を行なう上で、調査票が持つ意味である。しかしながらここではすぐに本プロジェクトに現れた具体的な問題を個別に論うのではなく、まず、統一的な考察の基盤として、調査票の持つ意味について考えてみたい。佐藤 [2002: 52] は印刷物としての質問紙が持つ意味を大きく次の四つに分けている。1) 問題意識の一覧表としての意味、2) 確認リストとしての意味、3) データ収集についてのマニュアルとしての意味、4) データ行列に象徴されるようなデータの空間的配置としての意味。たとえば、3) についてみれば、一定の形式で順序だてて構成された調査票は一つのデータ収集に関する行動を導くガイドラインとしての身をもつのであって、このことにより「誰もがデータ収集を分担できる」という共同作業が可能になっているのであるという。

ここから指摘できるのは、一つの印刷物として完成した調査票を対象として、人々（特に作り手＝調査者 (researcher)）が営んでいる活動のうち、少なくとも四つものが立ち現れているという点である。ここで問うべきなのは、どのような形で調査票を形成することによってどのような活動が一定に生じるか、という因果的な関係ではなく、こうした調査票がある手がかりとなってさまざまな認知的活動が展開するという、認知的道具としての調査票の意味であろう。

近年の認知に関する理論では、状況論・活動論・アフォーダンスといったさまざまなパースペクティブから、こうした道具の持つ認知的な意味がさまざまに指摘されている。すなわち、ある道具は、単に人々の内部的な状態（知識）をそのままの形で表現したのではなく、むしろそのような知識に関わる活動（記憶や一覧など）が一定の形で実践的に組織化される中で形成されていくものであり、そのような活動を可視化するために持ち込まれている人工物（アーティファクト）な

のである。たとえば研究室で雑多に積まれた書類やその配置は、一つのアーティファクトとして、その研究室にいる人物の記憶の性質を表現し、またそのような書類そのものが手がかり（リソース）となって（新たな）記憶や知識を表現する活動が生じることにもなる（石黒 [2001]）。

このように認知的道具とは、活動が一定に秩序だてて行なわれる環境を提供（アフォード）するものであり、同時にそのような環境を相互的に構成しあっていくことによって、ある特定の知識が持つがはじめて現れてくるのであり、その意味で知識というものは個体の内部に不変的に存在するものではなく、相互行為状況の中で構成される、きわめて社会的なものであるといえる。あらかじめ注意しておくならば、このような相互性について必ずしも複数主体を想定する必要はない。たとえばスケジュールの記憶といった活動に顕著なように、同一の主体が異なった時間的位置において、メモやノート（あるいはその総体としての空間）などを環境として配置し、そのアーティファクトをリソースとして、特定の知識や行動を適切な状況の流れのうちに喚起するという活動はきわめて日常に行なわれているからである。スケジュール表などの形でしばしば「プラン」として表されるものが、このような認知の状況依存性と非常に深く関わっていることは、サッチマンの指摘などでも明らかである（Suchman [1987 = 1999]）。

このような意味から、社会調査を一つの「認識の生産」＝ある認知の社会的な達成プロセスとしてみたうえで、調査票をその認識の総体である「作品」すなわちアーティファクトとして位置づける佐藤 [2002] の発想は一方で認知理論の流れからいっても妥当なものとしてみるができる。

### 3. 認識の多様性

しかしながら、このような観点は調査プロセスにおいて、一定の認識を一定の形で再現したり、共同的な認識を一定に達成したりすることを必ずしも保証するものではない。むしろ帰結するのは全く逆の点であり、あくまでアーティファクトとしての調査票が展開する認識の多様性にすぎない。ここでもまた、筆者による例よりも、まず近年の社会調査に関する 이슈となりつつある、相互行為 (interaction) としての調査 (インタビュー) の側面と、標準化 (standardization) の関係についての問題を取りあげて考えてみたい。

実際の標準化された質問紙を元に行なわれた電話によるインタビュー場面の分析を通じて、ウートクープ＝ステンストラ (以下HS) はインタビュー場面に二つの強制力 (constraints) が作用していることを指摘している (Houtkoop-Stenstra [2000: 12])。一つは標準化されたインタビューとしてのルールで、その多くは書かれた形で質問者の手元にあり、もう一つはそのようなインタビューが会話場面として組織化されるときに行為の中に生じる (書かれていない) 会話的な原則である。たとえば、表2の例は、「18歳以上の女性は何人お住まいですか」および「18歳以上の男性は何人お住まいですか」、さらに「世帯中の若い男性を無作為に選んで、重要な国勢調査についてインタビューしているのですが、そちらは該当しますか?」といった一連の質問について、軍と一緒にいたマークという男性のルームメイトと一緒に住んでいる、という回答をした男性に対して、「まず、あなたを含む世帯にいる全員の数を書いてください」という質問についてさらにこのような質問をしたものである。

この場合、3行目で回答者は「マーク」と直接的に発話することでサクスのいう「認証性 (recognitionnal)」という、参照さ

れている人物を特定する手がかりを与えている。日常の会話においてはいったん人物の参照が成立した場合、それはこのような認証性によって言及されるのが通常であり、「ある人」とか「友人の人」といった表現は使われない。そして、この参照によってはじめて、それまでは回答者の世帯構成について全く知識がないようにふるまっていた質問者 (interviewer) も「ルームメイト」として、マークが誰かを知っていることを示すようになっていく (回答者はその言葉に一致させて「ええ」ということでこの認証性の相互的な成立を確実なものにしている)。さらにいったんこのような認証性が生じると、その会話において「適切な量の情報を与える」という、会話の格率に照らして冗長性が発生するため、その後の個々の質問が必ずしも想定どおりの形式で作動しなくなる (質問が短縮されたり、質問者の方であらかじめ処理されたりする) ということを、HSはグライスによる会話格率の理論なども援用しながら指摘している。

ここにわれわれは、認知的活動としての質問紙調査の持つ二つの側面を見ることが出来る。つまり、質問の背後には標準化としてどのような相手にでも常に同じような形式での応答 (回答の用意) をする想定があるが、その想定を作動させる際、応答に関する会話的な活動によって、しばしば先に見たようなその標準化の想定とは別の次元が表面化してくることになるのである。しかしながら、ここにおいては、質問紙/会話あるいは調査者/回答者の認識のズレという単純な二項対立が前提にあるということではなく、むしろ質問紙というものが中心となって多様な認知活動が行なわれる契機が生じるという、リソースとしての側面を見る必要があるだろう。むしろこのような質問紙をリソースとした実践的な活動と対照されることによって、はじめて想定された次元 (標準化) というものが行為

者に可視化されてくると見ることもできるのである。

このような点から本プロジェクトを見ると、まず、調査票の作成において問題になったのは、質問の文言の形式において、必ずしも一定の形で標準化がなしえないということであった。このような点は、しばしば前回の調査票においてなぜこのような文言が使用されたのかが、文脈として理解できないためにそれが疑問として出されたり、また、下記にある調査者間で交わされた一つのメールのように、議論の場において特定の文言の修正がなされた後で、別の解釈の可能性が言及されたりするという形で現れていた。

「…昨日、日記式の電子メールの授受通数に関し、

職場にて／自宅にて の区別廃止

発信した数／受信した数 のみ

と書きました。これは研究会の議論を反映したのですが、考えてみれば、電子メールの授受回数をカウントする場合、多くの人にとって「職場」と「自宅」ははっきり区別できるもので回答にさほど負担はなく、両者の区別は結構意味があると思ってきました…」

ここで注目したいのは、単にある質問の文言が文脈とは独立して多様に解釈できるということではなく、「議論の場／メールでの（独白の）場」という状況と結びついた形でそれぞれの意味が成立しており、特定の状況で成立した文言（「職場にて／自宅にて の区別廃止」）があらたなリソースとなり、それが別の状況で新たな説明をともなって（「考えてみれば」「多くの人にとって…」など）、別の「意味」を構成しているという点である。つまり、このような「文言」は常にその時々状況に結びついた形で「理解」を構成されているのであって、そのような状況

間においては、たとえ同一の質問に対する同一の作成者であっても時間的な状況の差によって、それぞれの状況に結びついた「解釈」の狭間に立たされる可能性を持っていることが示される。確かにこのような可能性は統一した形式で継続的に行なうという前提にある本調査の場合には強く意識されるものの、実はこれが先に見た質問者と回答者の応答の場面など、さらに作成者の手を離れた別の状況でさまざまな解釈を構成する可能性に展開しているのである。

しかしながら、ここで質問の「標準化」や、質問を「量的」に行なう調査に疑義をさし挟むことは本稿の目的ではない。むしろそのような可能性におかれた中で「標準化」された質問を達成しようとする人々の営みに注目し、われわれが無前提に質問について「標準」としていることもまた、あくまでそうした人々の営みの中で状況的に達成される中で、はじめて意味を持つということについて考える必要がある。たとえば、すべての回答者に対して同様の形式で質問を繰り返すことは、もちろん「標準化」の想定に属するものであるが、表2のような会話としての認証性が成立した場合、「マーク」という形で対象に直接言及するほうが、むしろ異なった質問の間で対象を同一のものに特定する意味では、当該の応答において効率を持ってその理解が達成されると考えられ、逆に「標準化」された機械的な繰り返しは冗長であるだけでなく、質問の理解に混乱をもたらす可能性を持つのである。

また、同じく HS の分析例によれば、質問者が質問について回答者の面前で「私がこれを書いたわけではありません。わたしはただこれを伝えているだけで、それ以上のことは言えません」という「標準化」されていない言及をすることがある（Houtkoop-Stenstra [2000: 49]）というが、これはむしろ、その場にいない第三者に言及することでむしろ

「標準化」を行なうというふるまいにほかならず、単純に質問紙にないことを決して述べないのが「標準化」であるという一般的な想定もまた疑問にさらされる。

リンチは質問紙を「生きたテキスト (living text)」とよび、それが実際の状況でどのように行為されているのか (in action) という側面に注目しながら、質問に関する文脈を排除した (context free) 調査デザインが混乱や誤解を生じやすくする可能性に言及しており (Lynch [2002]), その意味で、以上のような形で一般に想定された「標準化」は単純に文脈を排除する営みとして位置づけることができるだろう。本稿が問題としたいのはその排除という営みであり、決して「標準化」という営みそのものではない。

#### 4. 「標準化」の達成

さて、このような可能性をふまえて、標準化の営みを見ていくとき、まずあげられるのは、質問者もしくは回答者に対する調査者の指示 (instruction), いわゆるマニュアルであろう。本プロジェクトにおいては、特に2000年度の調査については作成されていたが、前回に関しては特に調査員マニュアルという形で独立した形では作成されなかった。むしろ、前回の調査に対する標準化についての議論を背景にして、それを達成するために作成されたものとしてみることができる。この意味で、標準化についての指示もまた、状況的に構成されていたのであった。

また、このようなマニュアルは、先の佐藤 [2002] での指摘にもあったような、調査者そのものの認識を示すことがある。表3では、それぞれの行動について単純にケースごとの処理手順を伝達しているだけでなく、「テレビを見る」・「携帯電話」を利用するという情報行動についての調査者側のもつ認識を表すにもなっている。実際このような点は近年の情報行動の変化として、マスコミ研

究としても重要な問題意識に関わるものでもあった。

このような点から、データ管理という問題を考えた場合、質問紙作成当時における調査者の認識を理解するためのリソースとして、マニュアルというものが持つ意味があらためて指摘できるのであり、それは単に「調査員への手引き」という一般的な想定によって調査者の認識から排除されるべきものではない。この意味で、調査票作成のプロセスに関する手がかり (議論の記録 (議事録) や草稿へのメモ書きなど) だけでなく、それが作成当時どのようない形で標準化されていたのかという手がかりとして、こうしたマニュアルや回答者への説明といった言説にも注目が必要であろう。

もう一点指摘しておきたいのが、分析の際に用いられるソフトウェアが持つ意味である。たとえば、林 [2001] はSASのプログラムに見られるような「バッチ型」処理とウィンドウズのようなコマンドを選択して行なうような「対話型」処理について、前者ではどのような手順を持って計算を行なったかが後で容易に再現できるのであるが、後者に関してはそれが困難であることを指摘しているが、これは処理過程を固定することによって、データ形式が固定化し、このような処理過程が不可視なものになることを示していると考えられる。つまり、「対話型」の場合、そのデータ形式は処理過程という活動を再現するためのリソースとなりえないということで、逆にバッチ処理の場合は、構成されるデータセットとプログラムが対になることで、それぞれにおける過程がその存在として可視化しているがために、再現性が強いというものである。たとえばSASではデータセットを合成する場合は、mergeといった命令文とそのプログラム、さらに合成される対象となるデータセットの存在によって合成の過程がそのまま可視的に再現されうるが、

対話型では合成されたデータセットのみが残り、合成する過程そのものが事後に欠落してしまうのである。

その点で、バッチ処理のプログラムというものが、認知過程のリソースとして持つ意味をあらためて指摘できる。プログラムは単なる機械的な処理の道具ではなく、それを讀んだり、書き加えたり、あるいはそれを再解釈することによってさまざまな認知的活動を展開するリソースになっているのであり、その中に「当時の」認知活動を再解釈するという意味での「再現性」が含まれている。その意味では、単純にプログラムの存在がそのまま再現性を意味するのではなく、あくまでそのプログラムをリソースとして展開する認知的活動の中にその「再現」が現れるに過ぎない。その意味ではあくまで理解は現在進行の形で行なわれているのであって、理解はそのまま「当時」と同一の過程で「再現」されているわけではない。これはただ古いプログラムを動かしてもそれが何をしているのかがすぐに理解できないことで明らかであり、そこにある認知過程を理解するには、何回か動かしながらアウトプットを照らし合わせたり、他のプログラムとの比較したりするなど、さまざまな認知活動を伴って初めて可能になる。

こうした中で強調されるのは、このようなアーティファクトに関わる認知活動が、調査者といった個人の中で完結するのではなく、マニュアルを通じた調査者と質問者間のコミュニケーションや、質問紙を通じた質問者と回答者間における応答、さらにプログラムを通じた調査者間の分析過程・結果の共有など、あくまで相互的な行為と密接に結びついた形で行なわれることで達成されているという点である。その意味では、現在と「当時」をつなぐ—これこそがデータベースやアーカイブに想定される重要な機能であるが—一場面において、「当時に再現する」という認知活

動も、「当時」の調査者（あるいは自分）と現在の調査者（あるいは自分）との相互行為として行なわれると見ることもできるであろう。本稿が調査票を通じてデータ管理の問題として考えている点もまさにここにある。

## 5. 「標準化」の実践のために

最後に、以上からどのようにデータ管理における「標準化」（あるいは再現性といえるかも知れない）を実践するかという課題において、考えるべき点について挙げておきたい。

まず強調すべきなのは、文脈的な手がかりをそぎ落とすことで「標準化」とすることは論外にしても、逆に単純にこのような「手がかり」を無造作に増やすこともまた、そのままでは必ずしも「標準化」に向けてポジティブな意味を持たないという点である。むしろ、注釈に注釈を加えるという試みにあがちなように、このような「手がかり」の氾濫が混乱をもたらすことは容易に想像できる。したがって、データアーカイブの作成やデータ管理という点で、あらゆる手がかりを無作為に収集することは、一つの理想ではあるにしても必ずしも有効ではない。

ここでは、あくまでサーベイ・リサーチの成立が一つの「標準化」の営みであるという認識に立ち返り、その「標準化」に関わる行為の相互的な連鎖に目を向ける必要があると思われる。つまり、単純に書かれたものとして「標準化」を想定された調査マニュアルや「ダブルバーレルの排除」などといった一般的なルールとは別の次元で、調査票の作成者がいかなる実践的な基準によって「標準化」というものを共同的に構成しているのかを、たとえば調査者の調査票作成時の議論や、質問者と回答者の応答や、分析プログラムの記述（データの重みづけやサンプルの合成または削除など）などといったものをさまざまに絡ませながら（相互的に）参照していく必要

があるように思われる。むしろ、さまざまな資料はそのような相互に開かれた次元の中に読み取られなければ、そうした資料自体の存在と作成の営みは無駄ではないにしても、それぞれの断片における読み取りが単なる重箱の隅をつつくような行為に陥るおそれがあるからである。そしてそもそも、調査票の作成過程の中でそのような標準化が目指されなければ、当然そこでの手がかりが言語化されることがないのも事実である。その点では、仲間うちの閉じられた言語は論外として、外から受動的に読み取られるのを待つ「手がかり」をやみくもに増やすよりは、外に向けて意識的に詳細な調査過程を記述したマニュアルの作成を調査票に付随して行なうことがもっとも現実的に有効であるように思われる。これは調査自体がルーチン化する中で、暗黙視されている前提(あるいは思い込み)を敢えて問い直すという点でも有効であるように思われる。ここにおいて、外に向けてのどのような記述が有効であるかに関して、自らの調査がどのように行なわれているかということを日常的な観察から素朴に導き出す、調査実践に関するエスノグラフィックな観察と記録が実施・蓄積されることが必要であろう。

また、その一方で、調査プランのデザインから調査票および分析プログラムの作成と実施、さらに結果の保存までに一貫した、いわゆる「データ管理技術」に関する知識と方法を、実践の中で明確なものにしていく教育過程も必要であるように思われる。日頃学生による講義ノートや資料の保存状況だけを見ても、学習態度とは関係なく多分に性格的なものだけによって、ファイリングの道具といったごく簡単なものさえも使うことなく、書類を汚損・紛失するという事例を目にすることがあまりにも多い。そのような教育的実践は単なる整理の問題にとどまらず、認知過程を可視的に整理し、組み立てていく意識につながるという意味で、ある種の「論理的思考」を

育むことと無関係ではないだろう。むしろそのような思考もまた、そのようなさまざまな技術やアーティファクトとの相互的な関連の中にこそ生じていると考えられるのである。

※本稿は2002年3月の本ワークショップにおける本人の報告に大幅に加筆修正したものである。

## 文 献

- 林 理 (2001) 「「対話型」では困るとき」『スーパーコンピューティングニュース』3(6): 21-25頁
- Houtkoop-Steenstra, H (2000) *Interaction and the Standardized Survey Interview*, Cambridge University Press.
- 石黒広昭 (2001) 「アーティファクトと活動システム」茂呂雄二編『実践のエスノグラフィ (状況論的アプローチ3)』金子書房: 59-95頁
- Lynch, M (2002) "The Living Text: Written Instructions and Situated Actions in Telephone Surveys", in Maynard, D. et al. (eds). *Standardization and Tacit Knowledge: Interaction and Practice in the Survey Interview*, John Wiley & Sons, Inc.: pp.125-150
- 東京大学社会情報研究所編 (1995) 『日本人の情報行動1995』東京大学出版会
- 東京大学社会情報研究所編 (2001) 『日本人の情報行動2000』東京大学出版会
- 佐藤健二 (2002) 「社会調査データベースと書誌学的想像力」『社会情報』11(1)札幌学院大学社会情報学部: 49-77頁
- Suchman, L. (1987) *Plans and Situated Actions: The Problem of human machine communication*, Cambridge University Press. = (1999) 佐伯監訳『プランと状況的行為: 人間-機械のコミュニケーションの可能性』産業図書

表1 東京大学社会情報研究所編(2001)より

表1.1.1 情報行動のメディア形式による分類表 ( )内は調査記入表のコード番号	
〈A. 直接情報行動〉	
: 伝達過程で機器を介さず, 音声言語や書字言語を用いて直接的に情報を授受・生産する.	
	人と話をする(打ち合わせを含む)(71)
	集会・会議・会合等に参加する(72)
	授業・講習・講演会に参加する(81)
	文章を手で書く(61)
〈B. メディア利用型情報行動〉	
: 情報機器を利用して情報を授受・処理・生産する.	
〈B1. パーソナル・メディア利用型〉	
: 情報機器を介して個別の様式で情報の授受・処理・生産を行う.	
B1(1)	コミュニケーション・メディア系
	: 情報通信機器を介してコミュニケーションを行う.
	電話で話しをする(51)
	携帯電話・PHSで話しをする(52)
	携帯電話・PHS単体で, 文字通信・情報サービスを利用する(53)
	※インターネット・パソコン通信による電子メール交換, ファクシミリについては, 行動持続時間が15分に達しない場合が多いと考えられることから, 基本カテゴリーとして設定せず, 日記式調査票上に別個にその回数を記載してもらった. 電話についても同様に利用回数も記載を求め, 15分以内の行為発生頻度をカウントしている.
B1(2)	コンピュータ・メディア系
	: 半導体が中心的機能を果たす情報機器の利用行動.
	ワープロ専用機を利用する(ゲームを除く)(31)
	パソコン等を利用する(ゲームを除く)(32)
	テレビゲームをする(25)
	ワープロ・パソコン等でゲームを行う(33)
	携帯情報端末を使う(34)
	その他の電子情報機器(電卓・電子辞書など)を使う(35)
B1(3)	その他のパーソナル・メディア系
	: その他の情報機器を介した個別の様式の情報の生産・編集・複写行動.
	ここでは「カラオケ」も個別様式の情報生産行動と見なした.
	コピー機を利用する(83)
	ビデオカメラで撮影する(84)
	カラオケをする(85)
〈B2. パッケージ・マスメディア接触型〉	
: マス生産された情報を時間的に個別に享受する. 内容の加工・付加は伴わない.	
	新聞を読む(11)
	本を読む(マンガ・雑誌を除く)(12)
	雑誌(マンガを除く)を読む(13)
	マンガ(単行本・雑誌)を読む(14)
	新聞・雑誌・本・マンガ以外の活字文章を読む(15)
	テレビ番組を録画したビデオを見る(22)
	レンタルあるいは購入した既製のビデオソフトを見る(23)
	レーザーディスクを見る(24)
	テープ・CD・レコードを聴く(42)
〈B3. マスメディア接触型〉	
: マス生産された情報を同時に多数で同時に享受する.	
	テレビを見る(21)
	ラジオを聞く(41)
〈C. その他の情報行動〉	
: カテゴリーA・Bに属さない情報行動. とくに人為的に構成された情報空間への参加.	
	映画・演劇・美術館・コンサート・スポーツ観戦等に行く(82)
	その他(86)



表2 (Houtkoop-Steenstra [2000:71] より)

- 1 I : hh あなたと親類関係でない方はそちらに何人住んでいらっしゃいますか？  
 2 (1.3)  
 3 R : あー : : その (0.3) マークですよ, 一人とね,  
 4 I : [ #  
 5 I : そうですね, その : あなたのルームメートでした [.hhh ね, それで  
 6 R : [ええ

※記号 I : 調査者 R : 回答者 h : 笑い # : キー入力の音 [ : 会話の重なりをあらわすカッコ内は沈黙の秒数

表3 「日記式調査の記入方法補足 (調査員への手引き) から抜粋

- 「・パソコンでDVD (映画など) を見ていた場合, またはプレイステーションでDVD (映画など) を見ていた場合は, 24 (レーザーディスク・DVDを見る) を選んで下さい  
 ・パソコンでテレビ番組を見ていた場合, 21 (テレビを見る) を選んで下さい.  
 ←※あくまで実質的な内容にしたがって分類して下さい  
 ・携帯情報端末 (パソコンの機能も備えた小型の端末で, 単独では電話をかけたりはできない) を電話または携帯電話・PHS につないで電子メールを送受信した場合は, 34 (携帯情報端末) ※を選び, さらにインターネット利用行動で1を記入してください。」  
 ※本文中では赤字で記入されていた